

## メッセージアウトライン サムエル記第二2：1～32 「ヘブロンで王となるダビデ」

[1]「この後、ダビデは主に伺った。『ユダの町のどれか一つへ上って行くべきでしょうか。』主は彼に『上って行け』と言われた。ダビデは『どこに上ればよいでしょうか』と聞いた。主は『ヘブロンに』と言われた」

アマレク人を打ち破り、妻子や財産を取り返し、また戦勝品をもって滞在地のツィクラグに帰って来たダビデたちであったが、そこはすでにアマレク人に焼き払われていたので、ダビデはこれからどうすればよいのか主のみこころを伺うことにした。これは大祭司の着る祭服エポデに付属している箱に入ったウリムとトンミムという道具によって大祭司を通して主のみこころを伺うものである。この時の大祭司はエブヤタル。→ I サムエル30:7-8 その結果はユダの町へ上るべきことと、具体的にはヘブロンにとの主の答えがあった。

[2-3]「ダビデは、二人の妻、イズレエル人アヒノアムと、カルメル人ナバルの妻であったアビガイルと一緒にそこに上って行った。ダビデは、自分とともにいた人々を、その家族ごと連れて上った。彼らはヘブロン町の町々に住んだ」

ヘブロンはかつてイスラエルの先祖アブラハムが住んでいた地であった。ここにアブラハムと妻サラ、その子イサクと妻リベカ、その子ヤコブ(イスラエル)とその妻レアの墓もある。→創世記49:29～33

ダビデはサウルから逃亡していた時に、特にユダの南部を中心に移動しており、ヘブロンでも助けてもらったことがあったので、この地に行くのは彼にとって順当であったと思われる。

[4a]「ユダの人々がやって来て、そこでダビデに油を注ぎ、ユダの家の王とした」  
「油を注ぐ」というのは王に就任するための宗教的儀式である。彼は父の羊を飼っていたときに、すでにサムエルによって油を注がれていたが、そのときにはまだ油注ぎの意味が十分理解できていなかったであろう。→ I サムエル16:13

今回の油注ぎは、ユダの人々による油注ぎで、彼をユダの王とするためのものであった。ダビデはユダ部族の出身であり、ユダの人々にとっては非常な親近感があったであろう。

[4b-7]「ヤベシュ・ギルアデの人々がサウルを葬ったことが、ダビデに知らされたとき、ダビデはヤベシュ・ギルアデの人々に使者たちを遣わし、彼らに言った。『あなたがたが主に祝福されるように。あなたがたは、あのような真実を尽くして主君サウルを葬った。今、主があなたがたに恵みとまことを施してくださるように。あなたがたがそのようなことをしたので、この私もあなたがたに善をもって報いよう。今、強くあれ。勇気ある者となれ。あなたがたの主君サウルは死んだが、ユダの家は私に油を注い

で、自分たちの王としたからだ。』

この葬りについては→ I サムエル31:11-13 かつて彼らはサウルによってアンモン人の攻撃から助けてもらっており、その恩義を決して忘れてはいなかった。→ I サムエル11章

ダビデは彼らを祝福し、自分こそサウルの真の後継者であることを示し、忠誠を尽くすように求めているのである。ここでダビデはユダの地だけではなく、北東のヤベシュ・ギルアデにも及ぶ広い範囲を視野に入れていることが分かる。

[8-9]「一方、サウルの軍の長であったネルの子アブネルは、サウルの子イシュ・ボシエテを連れてマハナイムに行き、彼をギルアデ、アッシュル人、およびイズレエル、そしてエフライムとベニヤミン、すなわち全イスラエルの王とした」

サウルはギルボア山で戦死したが、軍の長であったアブネルは死んでいなかった。ペリシテ人の攻撃はサウルと息子たちに集中していたので、アブネルは玉砕するよりもサウルの末子イシュ・ボシエテを連れてイスラエル軍を立て直すために逃れたのかもしれない。

「ギルアデ」とはヨルダン川東側のガド族やマナセの半部族の住む地で、「アッシュル人」とはアシェル部族のことか。「イズレエル」はイッサカル部族の町、「エフライム」はエフライム部族、「ベニヤミン」とはベニヤミン部族でサウルの軍の中心的部族。「マハナイム」はヤベシュ・ギルアデより10数キロメートル東のギルアデ地方の中心地。これらはイスラエルの北半分に及ぶ地域である。

「全イスラエル」とはユダ部族がダビデを王としたので、残りの部族のことを意味するのであろう。これは後の北王国イスラエルを意味するようになる。覚えておかなければならないことは、イシュ・ボシエテには王としての油注ぎや預言者による宣言という宗教的裏付けが欠けているということである。「イシュ・ボシエテ」とは「恥の人」という意味で本名は「エシュバアル(バアルを滅ぼす人)」→ I 歴8:33

[10-11]「サウルの子イシュ・ボシエテは、四十歳でイスラエルの王となり、二年間、王であった。しかし、ユダの家だけはダビデに従った。ダビデがヘブロンでユダの家の王であった期間は、七年六カ月であった」

ダビデは三十歳の時に王として即位しており(5:4)、サウルの長男でサウルと共に戦死したヨナタンは三十歳台前半であったと思われるので(4:4)、四男のイシュ・ボシエテが四十歳でイスラエルの王となったというのは疑問が残る。たぶんもっと若かったのではないだろうか。

ダビデはヘブロンで王となって、それで終わりではなく、やがて全イスラエルの王となるが、それには七年半という年月が必要であった。

[12]「ネルの子アブネルは、サウルの子イシュ・ボシエテの家来たちと一緒にマハナイムを出て、ギブオンへ向かった」

ギブオンはエルサレムの北西約10キロメートルのベニヤミンの地にある。アブネル

はユダ族と一緒にあって、国を統一するための相談に出て来たのかもしれない。  
[13-16]「一方、ツェルヤの子ヨアブも、ダビデの家来たちと一緒に出て行った。こうして彼らはギブオンの池のそばで出会った。一方は池の手前側に、もう一方は池の向こう側にとどまった。アブネルはヨアブに言った。『さあ、若い者たちを出し、われわれの前で闘技をさせよう。』ヨアブは言った。『よし、そうしよう。』ベニヤミンの側、すなわちサウルの子イシュ・ボシェテの側から十二人、ダビデの家来たちから十二人が順番に出て行った。彼らは互いに相手の頭をつかみ、相手の脇腹に剣を刺し、一つになって倒れた。それで、その場所はヘルカテ・ハ・ツリムと呼ばれた。それはギブオンにある」

「ギブオンの池」…直径40メートルほどもあり、深く掘られた人口の貯水池。ヨアブは北からアブネルの一団が下って来るのを聞いて、自分もダビデの部下たちを率いて上って行き、ギブオンの池のそばで出会った。「闘技をさせよう」…これは親睦のために武器を使わない相撲のようなものであったかもしれない。しかし、やがて最初の意図に反して剣を持った戦いになり、互いの十二人ずつが剣で刺し違えて死んだ。

「ヘルカテ・ハ・ツリム」…「刀の刃の野」という意味。

[17]「その日、戦いは激しさを極め、アブネルとイスラエルの兵士たちは、ダビデの家来たちに打ち負かされた」

イスラエルの兵士たちはペリシテ人とのギルボア山での戦いで、多くの勇士たちが死んだので、弱体化していたのかもしれない。

[18-19]「そこに、ツェルヤの三人の息子、ヨアブ、アビシャイ、アサエルがいた。アサエルは野のかもしかのように、足が速かった。アサエルはアブネルの後を追った。右にも左にもそれずに、アブネルを追った」

「ツェルヤ」はダビデの姉妹の一人。三人の息子たちはみな勇士であった。アサエルは「競争して馬を抜いた」とユダヤ古代史では言われている。

[20-23]アサエルの死

アサエルはイスラエル兵の長であるアブネルを追い続けた。アブネルは逃げながら他の者を追えと言ったが、アサエルは聞かず、アブネルのみを追いかけた。アブネルはなおも「ほかへ行け。なぜ、私がおまえを地に打ち倒さなければならないのか。どうやって、おまえの兄ヨアブに顔向けできるというのか」説得したが、アサエルはなおも拒んで、ほかへ行こうとしなかった。それでついにアブネルは、槍の石突きで彼の下腹を突いた。槍はアサエルを突き抜け、彼はそこで倒れて死んだ。アサエルの俊足による加速は追われるアブネルの突き出した槍の石突きが、自分の下腹を貫通するほどの強い力を与えることになった。アブネルは傷を負わず程度にするつもりだったかもしれないが、結果としてアサエルは死んだ。

[24] アブネルに弟を殺されたヨアブとアビシャイは彼を追い続けたが、太陽はすでに沈んでいる。「ギアハ」「アンマの丘」…詳しい場所不明。

[25-28]「ベニヤミン人はアブネルに従って集まり、一団となって、一つの丘の頂に立った。アブネルはヨアブに呼びかけて言った。『いつまでも剣が人を食い尽くしてよいものか。その果ては、ひどいことになるのを知らないのか。いつになったら、兵たちに、自分の兄弟たちを追うのをやめて帰れと命じるつもりか。』ヨアブは言った。『神は生きておられる。もし、おまえが言い出さなかったなら、確かに兵たちは、明日の朝まで、それぞれ自分の兄弟たちを追うのをやめなかつただろう。』ヨアブは角笛を吹いた。それで兵たちはみな立ち止まり、それ以上イスラエルの後を追わず、戦いを続けることはなかつた」

老練なアブネルはこの戦いが仲間同士の戦いであることを強調し、停戦を申し入れる。それを受け、ヨアブは角笛を吹いて兵たちの戦いをやめさせた。

[29]「アブネルとその部下たちは、一晩中アラバを通って行った。そしてヨルダン川を渡り、午前中歩き続けてマハナイムに着いた」

「アラバ」とは乾燥地帯を意味するが、ここでは死海に至るヨルダン溪谷を指すと思われる。

[30-31]「一方、ヨアブはアブネルを追うのをやめて帰った。兵たちを全部集めてみると、ダビデの家来十九人とアサエルがいなかつた。ダビデの家来たちは、アブネルの部下であるベニヤミン人のうち三百六十人を討ち取っていた」

ペリシテ人との戦争で弱体化したイスラエルの兵たちと、勇士ぞろいのダビデの家来たちとの戦いはその死者の数において大きな差をもたらした。

[32]「彼らはアサエルを運んで、ベツレヘムにある彼の父の墓に葬った。ヨアブとその部下たちは一晩中歩いて、夜明けごろヘブロンに着いた」

戦いは日没に終わり(24)、その翌日、ベツレヘムでアサエルを葬り、その日から一晩かけてヘブロンに到着した。ギブオンからヘブロンまでは約40キロメートルの道のりである。ベツレヘムからヘブロンまでは約25キロメートル。しかし、アブネルの部下の多くの戦死者たちはどのように運ばれたのであろうか。野ざらしか、後日か。

今日の箇所では教えられることは何か。

- ① ダビデは今まで王となることを控えていたが、ここで初めて自ら行動し、ユダの地、ヘブロンに上り、ユダの家の王となった。しかし、それをサウルの死まで待っていたことと、行動の初めに神のみこころを伺うというところに彼の信仰が現れている。
- ② ヤベシユ・ギルアデに使いを送ったということは、彼がユダだけでなくイスラエル全体を視野に入れていたことが分かる。
- ③ ギブオンでの戦いでサウル家よりもダビデ家のほうが力を持っていることが分か

る。

④ダビデはペリシテのガテの王アキシユに別れを告げていないので、アキシユから見れば、ツィクラグを焼き払ったのはユダの民で、ダビデはその復讐にユダに出撃して行ったと考えたのかもしれない。ダビデがユダで王となったということが聞こえて来たとしても、イシュ・ボシエテを中心とするイスラエル軍の勢力を封じ込めるため、ダビデ政権をヘブロンに置いておくことは自分達を利することになると思ったか。

⑤ペリシテ人支配下でイスラエル人同士が戦いを続けることが、身の破滅を招くことであるとダビデは知っており、全イスラエルの王とされることを、彼は静かに待っているのである。

やがてこのダビデの子孫として神の御子イエス・キリストが来られることとなる。ダビデは信仰をもって神の備えてくださるときを待ったが、今や救い主イエス・キリストが来られ、福音が宣べ伝えられ、すべての人に神の恵みによる救いが与えられる時代となっている。イエス・キリストにある信仰者は戦いではなく、主にあって一致して福音を伝える者とならなければならない。

マタイ1:6～16、28:18～20、Ⅱコリント6:2、エペソ2章